

① 活動のテーマ

テーマ 「自然」 ～自然と食を通じた探究活動～

② テーマの設定理由

当園は、園庭に畑や花壇、築山があり、近隣にも豊かな自然環境がある。日常的に戸外活動を行う中で、こども達は葉や花、虫、木の実など様々な自然物に興味を示している。

そこで、「自然」をテーマに設定し、こども達が感じた不思議や発見を大切にしながら、「どんなにおいかな」「触るとどうかな」など感覚的な気づきを深め、主体的な探究につなげていきたいと考えた。収穫、栽培をきっかけにはじまった探求の中で、食とのつながりへと興味が高まり、今回の実施へとつながった。

③ 活動スケジュール

準備：散策コース確認、図鑑や観察道具の準備、実食までのロードマップ

活動：園庭・公園で自然物探し、梅の収穫、シロップづくり、かき氷屋さん、実食
稲の植え付け、栽培と収穫、精米、調理、実食

過程：観察、話し合い、活動 掲示、

報告：毎月会議にてエピソード共有、振り返り

④ 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

図鑑、絵本、虫眼鏡、簡易顕微鏡、ライト、収集ケース、透明ボトル

自然物を置いて観察できるコーナー、瓶、すりこぎ、

探究活動を継続できる常設スペース

また、子ども達が自由に観察や比較ができるよう、室内に観察コーナーを設置した。

かき氷の機材、透明の鍋なども活動の流れにより用意をした。

⑤ 活動の内容

園庭や公園で葉・花・実・虫などを探し、気になったものを持ち帰って観察していた。

そのうちに、梅の実を拾うことに夢中になったこどもの興味から、

「あまいにおいがする！」「このウメを、梅干しにしてたべたい！」「どうやったら、ウメをたべられるの？」という、こどもの好奇心が膨らんでいった。

絵本や、図鑑などを見比べたりしながら、梅のシロップづくりに関する本を見つけ、それを「やってみたい！」という声に広がっていったため、梅シロップづくりを行うことになった。数カ月にもわたり、梅シロップを作り、保護者と一緒に味わえることにもなった。

また、これらの経験を経て、並行して育てていたイネについても、お米を食べれるようになるためには、どのようにすればよいか調べ、精米をしたり、ご飯を炊いたり、主体的にこどもたちが関わるようになった。梅、コメに関わらず、自然と食の関わりをより深く探求するような姿へとつながった。

⑥ 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

活動の初期は、友達同士で見つけたものを見せ合う姿や、「一緒に調べよう」と関わる姿が見られた。保育者は、子どもの気づきや好奇心に寄り添いながら、探究が深まるように一人の意見をクラスに共有をしながら、資料や材料の用意をするようにした。

保育者は、

「どこにあったの?」「どうやったたべられるかな?」「しらべてみようか?」

など問いかけを行い、子どもの気づきを言葉にしながらか共有した。

梅シロップづくりでは、

日々変化していく瓶の中の梅の様子を注意深く見守る姿や、絵本や図鑑などの資料との違いから、「つぎはこうなるはずだよ」と見通しをもって見守る姿などが見られた。

どうやって味わうかについても、こどもたちが意見を出し合い、「ウメジュースとウメかき氷をだすお店をやりたい」という話になり、それまでの過程を掲示にまとめながら、保護者に共有し、親子一緒に自作の梅シロップを味わうひと時を設けることができた。

お米づくりでは、

例年は稲が育ったところで、調理室の職員などが精米や調理をして、食べるだけに留まっていた活動が、梅シロップの経験から、「どうやったら食べられるのか?」というこどもの問いが生まれ、それに向き合う保育者の姿があった。結果、精米や、食べ方についても皆で話し合う中で、こども達が主体となった探求活動へと進んでいった。

⑦ 活動の様子が分かる写真



⑧ 振り返りによって得た先生の気づき

子ども達は、自然物の收拾だけでなく、それをどのように扱うかについても、様々に思考し、想像を膨らませるのだと感じた。試したいと思っていることに、保育者がどのように向き合うかによって、こどもの興味の高まりや、探求する喜びにつながるのだと感じた。

また、保育者が答えを誘導しすぎるのではなく、つねに「どうしたらよいと思う？」と問い返すことで、子どもたちが活動を自分のものとしてとらえ続けることができたのではないかと思う。一年を振り返った際に、卒園の際「ウメのかき氷を作って食べたことが1番のおもいで」と話す姿に、探究する活動の中にある、感動や心の成長についても感じ取ることができた。

今後も、自然に触れられる環境を十分に整え、こどもたちが気づいたことや、呟きをしっかりと聴いて向き合い、子どもの興味や発見を保育につなげていきたい。

活動実施計画 II

① 活動のテーマ

「表現（制作活動）」 ～身近な素材を使った「作りたい」を形にする制作活動～

② テーマの設定理由

当園では、「創造力と自立心」を保育目標に掲げ、こどもの自由な発想や創造力は、自分らしさを育むことに大きくつながると考えている。そのため、日常的な制作活動を、特に大切にしながら保育を行っている。「こうしたい」「こんなものを作りたい」という思いを表現しようと日々探求する姿を、いかに支えていくか。これらの活動に焦点を当て、「表現（制作活動）」をテーマとして設定した。

③ 活動スケジュール

活動前 素材、教材の準備、収集、アトリエ環境準備

活動当日 午前 制作活動（小グループ）

活動当日 午後 作品共有、振り返り

後日 展示、エピソード掲示

④ 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

絵の具、筆、クレヨン、チョーク、水性ペン、

ダンボール、空き箱、紙筒などのリサイクル素材

テープ、のり、ボンド、ガムテープ、ハサミ、紐、色紙など制作道具

常設のアトリエスペース

素材は種類ごとに分けて配置し、こども達が自分で選びながら制作できるよう環境を整えた。

⑤ 活動の内容

こども達の「〇〇を作りたい」という思いをもとに、必要な素材を選びながら制作活動を展開した。継続的に活動できるように場をアトリエ、保育室内に制作物の保管をできる場を用意した

ぬいぐるみづくり

1人の子が発した「ぬいぐるみを作りたい」の言葉をきっかけに、中身をどうするか、顔や手足、耳やしっぽなどどうやって作るか、こどもと一緒にどの素材を使うか相談をしながら制作活動をおこなった。その後、周りにいたこども達も、作りたいという声が上が

り、アトリエや教材室にそれらの素材を用意し、好きな場面でぬいぐるみを制作できるように整えた。

作ったぬいぐるみを大切にしておきたい、という気持ちにも応え、保管場所を用意したことで、ぬいぐるみを使ったあそびが継続するようになった。ぬいぐるみを巡る制作活動は、ぬいぐるみそのものを作ることにとどまらず、「着せ替えをつくる」「おうちをつくる」「ベビーカーをつくる」など、ぬいぐるみを活用したい思いの中で、様々な素材を使った制作活動も活発に展開するようになった。

並行して、ぬいぐるみの服だけでなく、自分が着るドレスもつくりたいという気持ちになり、ドレスづくりを行う姿にもつながった。ぬいぐるみのおうち作りで、空き箱をつなげて行う制作は、自分たちが入れる基地づくりへの発展も見られた。ぬいぐるみを作り始めた6月末から、卒園する3月まで長期間にわたって、作っては遊ぶ展開が継続した。制作活動が継続する中で、イメージしたものを形づくったり、こども同士で相談をしたり試行する姿が沢山見られた。

また、こうした活動の振り返りや、プロセスについてまとめたものを作成し、掲示して、保護者、職員間で共有をした。

⑥ 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

「ぬいぐるみをつくりたいんだけど、どうやって作ればいいかな？」はじめは保育者との対話の中で作り始めた子がいたが、その子の遊ぶ様子に憧れを持った数人が、作り方を訪ねながら、一緒にぬいぐるみを作り始めた。それぞれ素材を試しながら、「もっとこうしたい」と工夫する姿や、「ベビーカーがあった方がいいよね」「一緒に入れるおうちをつくらう！」など、友達とイメージを共有しながら遊びに必要なものを協力して制作する姿が見られていった。

保育者は、こどもたちがどんなものを作りたいか、発した声を基に、

「どうやったらできるかな」「どんな材料が合いそうかな」と、一緒に考える過程を大切にして活動を支えた。特に、制作材料の充実や、遊びを展開する場所の確保、保管場所や方法などについても、制作遊びが継続できるような環境構成をした。

⑦ 活動の様子が分かる写真



⑧ 振り返りによって得た先生の気づき

こども達は、様々なものをあそびの中で作り、日々それらを扱いながら、「試してみることに」や「友達と一緒に考えること」を楽しんでいた。長くこれらの活動が継続したことは、活動は自分の意見によって継続できるという安心感や期待感が、土台になっていると考える。

また、こどもは、自らのイメージと向き合いながら、個々のやりたいことを保育者に対して、「言葉にすること」ができていた。この様子を振り返ると、小さなころから保育園の中で保育者に、「〇〇したい」という言葉や思いを十分に受け止められてきた経験が、奏功しているのではないかと、という意見も挙がった。

こどもの探求や活動を支えるためには、指導や教導ではなく、こどもの興味関心に向き合う、こどもの思いを聴くこと、応えることにあることを、改めて職員間で共有した。保育者はこどもの思いを叶えるために必要な事、もの、環境をどうすればよいか応えることに徹した。それが、こども一人ひとりが自分らしく主体的に表現、制作する活動につながった。今後も、多様な素材や道具に触れられる環境を整え、こども達の主体的な表現活動を支えていきたい。